OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	続　奥の細道ところどころ
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1958, 20, p. 20-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68519
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

続　奥の細道ところどころ

小島吉雄

石巻から平泉へ　(二)

五月二十九日、わたくしは芭蕉よりは一月ほど早くこの地を訪れたわけである。夏服も汗ばむばかりの暑い日であつた。堤防に立つて、荻原井泉水氏の「奥の細道を尋ねて」の文を思ひ出してゐた。前にも述べたやうに井泉水氏が登米に来たのは、昭和三年七月下旬のことであつた。その時には既に芭蕉一宿の家は焼失してしまつてゐたらしい。「芭蕉が泊つた家といふのは、北上川の橋を東から渡つて二三町来て、郵便局の角を曲つた所に一宿庵といふ名の家がそれだと伝へられてゐたが、それも焼けてしまつて、山も庭もうごきいるゝや夏座敷、といふ句碑だけが残つてゐるといふ。」と井泉水氏はしるしてゐる。「山も庭も」の句は那須黒羽での作である。句碑は、それを此の処に借りて後人が建てたものと思はれる。井泉水氏はもとよりその句碑を見てゐない。人づてに聞いたのである。今もその句碑が残つてゐるかどうか、わたくしは知りたいと思つた。飯野哲二氏の「おくのほそ道の基礎研究」によれば、芭蕉が一宿した蓮沼検断の家ははやく断絶して、そのあとが吉田常治といふ人の居宅になつてゐるといふ。そして、その家の裏手に、井泉水氏の筆になる「芭蕉翁一宿の跡」といふ石標が昭和九年に建てられた。今、わたくしの探してゐる石標がそれである。吉田家の裏手といふのは北上川の土堤下である。その土堤下には、どこにも石標らしい何ものも見当らない。

さて、わたくしは、石標の在りかを誰かにきかうと思つた。堤防の上から今来た道を振りかへつてみると、先刻バスを降りた四ツ角の陶器屋に四十がらみの中脊の主人とおぼしく店先の品物にハタキをかけてゐる姿が見える。あと戻りして、その人に芭蕉翁一宿の碑のことを尋ねると、「ああ、あれですか」と言つて、ハタキを持つたまま堤防の上までやつて来てくれた。

その説明によると、このあたりは先年の北上川の大氾濫のためにすつかり様子を変へてしまつた。もとの堤防はもつと川に寄つてゐて、川幅は今よりも狭いものであつた。従つて堤は今のやうに直ぐ人家に接してゐなかつた。芭蕉一宿の家の裏手には欅の大樹が茂つてゐた。そして、その木の下に一宿の碑が建つてゐた。

「それ、そこのバラック建ての家の庇に蒲団の干してあるところがその家です」と、ハタキの柄でゆびさす方を見ると、低い煤けた屋根の傾きかかつた上に木綿の縞蒲団が陽光を吸つてゐる。北上川の改修工事のために川幅を広げ、新しい築堤工事で欅の木も伐られてしまひ、一宿の碑を取り除かれたのださうだ。もちろん、最近のことである。その碑はどうしましたときくと、八

幡神社の境内に持つて行かれたといふ。八幡神社は左手に見える森で、近くだから、行つて見なされともいふ。句碑を知りませんかといふと、よく知らぬがそれはどこか他に持つて行かれたのではないかと答へる。この町の印刷所の主人は俳人で、この土地のことにも委しく、文献も持つてゐるから、訪ねてみてはどうか、自分が案内してやらうと勧めてくれる。好意を謝しつつ、先を急ぐ旅だから、またの機会に譲りたいと言つて断ると、更にいろいろなことを説明してくれた。今の登米大橋の上手百米足らずのところに昔の渡し場があつた。芭蕉も多分その渡しを舟で渡つたものと思はれる。そして、今われわれの立つてゐる此の登米がはの堤が昔の一の関街道で、この堤を上流の方へ辿つてゆくと米谷へ出るのである。芭蕉はこの道を行つたのだ、といふやうなことをも教へてくれた。「橋板がポンピンポンピンと一枚一枚跳ねるので、ピアノの鍵盤をたたいて渡るやうだつた」と井泉水氏の書いてゐる、そのかみの板橋だつた登米大橋も今は立派な鉄筋コンクリートの堂々たる姿でわたくしの眼前にある。時代的変遷に感慨を催しながら、その瀬戸物屋の主人とその店の前で別れて、わたくしは八幡神社に向つて歩いて行つた。

三日町を南に歩いて行き当つたところに龍源寺といふ寺がある。門前に贈正四位葛西肥後守清貞公歴代之史蹟と書いた大石柱が建つてゐる。葛西氏はもと登米の城主であつた。その家臣の後裔は今もなほこの附近に散在してゐるらしい、それらの寄附によつて、これが建てられた。葛西清貞は吉野朝のために働いた武将である。その墓がこの寺にあるのであらう。寺のところを右に曲つて、また左折すると、まつ直ぐに八幡神社の丘である。森になつてゐる。社はその丘の中腹にある。社の背後は、展望台風の小公園と言つたかたちである。しかし、この境内には、戦没者の忠魂碑や軍馬佐村号の碑といふやうなものだけが目に立つて、芭蕉一宿の碑などはどこにも見出だせなかつた。さつきの陶器屋の主人の話は御当人の思ひ誤りだつたと見える。飯野哲二氏の説だと、「降らずとも竹植うる日は蓑と笠」の句碑もある筈であるが、それもよく分らなかつた。

芭蕉は「心細き長沼にそうて、戸尹摩といふ処に一宿して平泉に至る」と書いた。歌枕でない地名は、とかく省略しがちであり、一宿二宿した土地でもその名をあげてゐない場合があるのに、わざわざ登米の地名を書きしるしたのは、何故であらうか。当時の登米は伊達家の支藩伊達村直の城下であつた。今わたくしの立つてゐる八幡社の石段の真向ひに見える小高い岡がその城館の跡であつて、登米の町はこの八幡社と城址との間に小ぢんまりと眠つてゐるのである。昔もさほどに大きい町であつたとは思へぬ。特記すべき歌枕もない。しかし、芭蕉は登米に一宿としるした。「奥の細道」で宿つた地名をあげてゐる時は、必ずそれだけの意図があつてのことであつた。「飯塚に宿る」といへば、その飯塚でのわびしき一夜を精叙せむがためであり、「岩沼に宿る」としるしたのは、その次に武隈の松を叙せむがための伏線であつた。登米の地名をあげたのも何かの作意があつてのことであらう。もちろん、細長い沼のほとりを辿り登米に一宿したのは事実である。事実であるから、記事にしたのであらうが、しかし、芭蕉は文の効果を勘案して事実を文中に採りあげるのであつて、事実を忠実にすべて書きしるすわけではない。事実を省

筆する場合がすくなくないのである。「戸伊摩といふ処に一宿して」と書いたのは、恐らくは、心細き山峡を辿り来つて、この登米の町に宿つた時のホッとした安堵感をこの一句に盛り込まうとしたのであらう。「戸伊摩」と書いたのは、宛字であり、「とよま」を「といま」と聞き誤つたのである。曽良の随行日記にも「戸いま」または「戸今」と書かれてゐる。東北人の鼻にかかつた発音は「といま」と訛聞するよりほかなかつたのであらう。伝へによつて、検断庄左衛門の宅址に一宿の碑を建てた。しかし、芭蕉は果してそこに宿つたのであらうか。随行日記には「宿不借、仍検断告テ宿ス」と記されてゐる。従来はこの記事を、初め宿を求めた家が宿を借さなかつたので、検断のところへ行つて泊めてもらつたのだと解釈してゐる。わたくしもその解釈に従つて、さきにその旨をしるしたのであるが、よく考へてみると、この記事は、宿を貸さなかつたので、検断に頼んで、検断の斡旋で宿を貸してもらつたといふ風にも解せられる。もし、そのやうに解釈するならば、芭蕉は検断の家に泊つたのでなくして、他の家に泊つたのだといふことになる。随行日記では、「宿不借」の傍に「儀左衛門」と書き入れてあるから、その儀左衛門といふ家に泊めてもらつたのだとも考へられる。すると従来検断家に泊つたといふ説はあやしくなる。また、飯野氏の「おくのほそ道の基礎研究」には、明和年間に金指絞兵衛なる者が一宿庵と号して蕉風を樹てたとある。井泉水氏の記すところでは、一宿庵の跡がすなはち芭蕉一宿の所といふことになるわけだが、一宿庵といふのは後人の興すところであるから、一宿庵の跡必ずしも芭蕉一宿の跡といふことにはなるまい、それが一致するためには、よほどの考証が必要であらう。考へてみると、さつき見た干し蒲団のある家が果して芭蕉の泊つた所であつたかどうか、よく分らないのではないか。

一宿の石標の見当らぬまま、わたくしは、右のやうなことどもをさまざまに脳裡に浮かべながら、人通りもない静かな埃つぽい家並の間を八幡社から登米駅の方へ歩いて行つた。

駅では十一時半の気動車がすでに発車したところであつた。零時二十分まで四、五十分を待ち合はさねばならない。登米から瀬峰という所まで仙北軽便鉄道が通じてゐる。わたくしは、この鉄道で米谷まで行かうとするのである。芭蕉の歩いたところをこちらは気動車で行かうといふのである。

小島ともう一つ、寒駅を過ぎて、三つ目が米谷であつた。ここで車を降りて、花泉行きの乗合バスに乗り換へるのであつたが、登米で道草を食つたためにバスに乗り遅れた。花泉で東北本線に乗りかへて一関まで今日ぢゆうに行くつもりなのだが、次の二時のバスでは東北本線との連絡がよろしくない、従つて一関着が夜おそくになる。駅でバスの時間表を調べてみると、ここを通るバスに仙北バスと県南バスとの二路線がある。前記二時のは仙北バスの方であつて、県南バスの方には四時三十分米谷発花泉経由一関行きといふのがある。これだと一関へ午後の七時前に着ける。更に、持参の地理調査所の五万分の一地図を広げてみると、この一関行きバスの通るところは、完全に芭蕉の通つたコースである。この寒駅で四時間も待たされることは些か困るけれども、芭蕉のコースといふ魅力に惹かされて、その四時半の一関行きバスまで、ここで待つことにした。

駅前に一軒の食べ物屋がある。支那そば

以外は何も出来ないといふわびしい店である。その支那そばで遅い昼食をすませた。

さて、米谷の町は、この駅から一粁半ほど東方、北上川を向うへ渡つたところにある。町へ行つてみようと思つて少しばかり歩いてみたが、山坂道は容易に川岸へ出ない。疲れを覚えて引き返して来たが、芭蕉が登米から歩いて来た道は北上川の右岸であつた筈だから、芭蕉も米谷の町は過ぎずして、わたくしの今ゐる米谷の駅の方へと辿つて来たわけだ。駅のあたりは、浅水村に属してゐるのである。北上川は米谷の北方一キロ半ほどのところで大きく彎曲してゐる。すなはち、この米谷の駅のところまで一気に南下して来た川が大きな弧を描いて北に流れ、一キロ半ぐらゐ行つたところでまた彎曲して再び南下するのである。駅から百米ほども西へ行くと、この北上川のS字状をなしてゐる雄大な風景を一望にすることが出来る。河原の石塊に腰をおろして、わたくしは時の経つのを忘れたのであつた。郭公があちこちの緑の中で頻りに鳴く。昼の郭公は淋しいものであるが、久しぶりに都塵に遠ざかつて新鮮で素朴な田園の空気に浸る喜びを満喫してゐるわたくしには、その郭公の声も洗腸の感じであつた。

芭蕉はここから北上川に沿うて関街道を北行して、上沼村に出たのである。花泉行バスの道筋である。バスは弥勒寺前に停り、長根で停つた。共に上沼村の内であるが、芭蕉の時は長根まで来たら、雨が降り出したのであつた。バス道は次第に山間に入り、長崎、杉山といふやうなところでは、まだ一人、二人の乗客があつたが、九千沢、永井のあたりに来ると、乗つてくる人が一人もない。長根を過ぎると岩手県に入るのである。西磐井郡である。岩手県側に入ると急に土地の貧しさが目立つ。金華山、庚申、矢ノ目を経て、涌津に入る。涌津は、曽良の日記には安久津としるされてゐるところである。涌津は細長い町である。下ノ町、中町、上町となつてゐる。芭蕉は松島からここまでずつと歩いて来たのであるが、この辺りで雨が強く降るので、ここから馬に乗つた。涌津は当時から一寸した宿駅であつたらしい。このあたりから、少しばかり土地が開けて来て、間もなく花泉駅に着いた。時刻は十七時四十分。バスはここで二十分の時間待ちをして、新しい乗客を満載して、一路一関へと向ふのである。

金沢もまた細長い宿駅であつた。上、中、下に別れてゐるが、家並みは続いてゐる。曽良の日記に「加沢」と書いてゐるのは、この金沢のことらしい。金沢を通り抜けると、道はすつかり山坂道になる。大門、峰、樅木立、宇南田を経て、真柴のあたりで漸く奥羽本街道に合し、一の関中学校前を通つたかと思ふと、間もなく、市内の繁華街になつた。終点は一関の駅前である。到着は午後六時四十分。終点の向ひ側にある佐藤ホテルの客となつた。あたりは、すつかり暗くなつてゐた。芭蕉達は黄昏に一関に着いたが、雨のために合羽も濡れとほるほどであつたといふ。

曽良の日記にも「加沢三り、皆山坂也、一ノ関黄昏に着」とある。すなはち、金沢から大門を経るの道を辿つたものと思はれ、その間の距離はほぼ三里に近い。わたくしは自分の今通つて来た道をまた芭蕉の通つた道だと考へて差支へないであらうと思つた。もちろん、細かに言へば、道そのものは芭蕉の時代と幾分違つてゐるかも知れないけれど、道順はほぼ一致してゐると見てよいであらうと思つた。芭蕉はここを馬で通つたのである。

芭蕉は一関に宿をとつた。その一関での宿を地主町の金森家であるとしたのは、飯野哲二氏である。「おくのほそ道の基礎研究」にそのことが記されてゐる。わたくしは遅い夕食を認めながら、宿の女中に金森家のことを尋ねた。中年過ぎた土地者であるから、いろいろと話してくれた。金森家は昔から二軒あつたこと、そのうちの一軒はもうこの土地に残つてゐないこと。今残つてゐるのは、酒屋で計量器店である金森家であること、この金森家は古くからの名家で、明治九年の明治天皇東北御巡幸の砌、お泊りになつた由緒のあること、芭蕉さんも泊つたとかで、その書いた物も残つてゐるといふ話であるなどと語つてくれた。そして、先年の颱風で磐井川が氾濫した時、その家のあたりもすつかり押し流されてしまつて、今はただ土蔵が一つ型ばかり残つてゐるだけだといふことであつた。夕食後、わたくしは、教へられて、その地主町へ出かけて行つた。大町通りの繁華街を通り抜けて左折すると、地主町である。地主町を真直ぐに行くと、大きな橋に出る。磐井橋である。その下の流れが磐井川である。北上川の支流であるが、大きな川である。その橋の東詰の南側にコンクリートのバラック建ての金森計量器店がある。酒店の方は別に田舎の方で開いてゐるといふ。もう店は締まつてゐる。計量器店は道路に面して、道と同じ平面にあるが、その店の背後も、店と橋との間の空地も、道よりは二米ほども低くなつてゐる。道路の上から、その薄暗い低地を見おろすと、真下に明治天皇行幸記念の標柱が無雑作に横倒しになつてゐる。その傍にはマーガレットらしい花叢が夜目にもしるく白く浮いて見える。そして、その向うに壊れかけた白壁土蔵が建つてゐる。まさしく金森家の屋敷跡らしい。洪水でいためつけられた名残りがまだ痛々しく残つてゐるのである。

この金森家に芭蕉が泊つたといふのについては疑ひがある。小林文夫氏の「岩手俳諧史」には、飯野氏が証拠とする金森家の書伝はいづれも幕末明治初年のものであり、従つて証拠としては不十分である、また飯野氏が芭蕉を宿した当主を金森利平ではないかと推定説を述べてゐるのに対しては金森利平は、この金森家に関係のない人であつて、もう一軒の方の金森家の人であつたと言つてゐる。金森家には二軒ある。一軒はここにいふ代々酒屋だつた金森家であり、計量器店を営んでゐる金森家であるが、もう一軒の金森家は旅籠屋をしてゐて、金森屋と号し、金森利平の血統である。もし芭蕉が泊つたとすれば、この旅籠屋であつた金森家であつたとする方がよくはないかとも言つてゐる。また、芭蕉の泊つたのは、金森といふ家ではなくして、地主町の検断をしてゐた白土といふ家であつたといふ説のあることをも併せ紹介してゐる。かういふ風に諸説のあるところから考へると、わたくしの今見てゐる金森計量器店の屋敷は、或は芭蕉の泊つたところではないかも知れない。しかし、今眼前の暗夜の廃墟はわたくしの感傷を誘ふに十分である。白土家も旅籠屋の金森家も今はすでに亡んでこの所にはないといふ。ひとりこの金森家だけが廃墟を存してゐるのである。芭蕉はここには泊らなかつたかも知れない、泊らなかつたとしても、この荒れた土地に芭蕉のイメージをゑがいて惆悵のおもひに浸ることは、わたくしの自由である。金森計量器店は暗くひつそり寝しづまつてゐる。その隣りの菓子屋は燈影も明るく店を開けてゐる。わたくしはその店に入つて、そこに売つてゐ

る芭蕉最中を記念のために買つた。

地主町は平泉へ行く街道筋に当つてゐる。芭蕉がここに宿をとつたといふことは、極めてありさうなことである。また、杉浦正一郎氏の校訂した曽良随行日記の五月十三日の条には、申の上刻に平泉より一関の宿に帰つて一風呂浴びてゐるが、その時の記事に、「主水風呂敷ヲシテ待、宿ス」とある。「敷」の字は書き誤りであらうと杉浦氏も註してゐるが、ともかく、これは主人が水風呂をして待つてゐたといふのであつて、水風呂は水から沸かした風呂で、われわれの今いつてゐる風呂のことである。「主水風呂ヲシテ待」と特記したところは、主人の芭蕉たちに対する特別の好意が見られるのであつて、普通の宿屋での趣きではない。或は、芭蕉たちは旅宿を業としない普通人の家に宿つたのかも知れない。

今にも一降り降りさうな空模様になつた。買つたばかりの芭蕉最中を小脇にかかへながら、急いで宿に帰つた。

翌朝、目がさめると、小雨が降つてゐた。窓越しに蘭梅山の無線中継の鉄塔が煙つて見える。今日は、これからバスで平泉へ行かうとするのである。

一体、東北の宿屋はみな宿賃が安い。石巻でもこの一関でも一流の泊りをしながら一宿七百円あまりである。客は、定期的な商用の客が多くて、観光のための客はすくないといふから、そのためなのかも知れない。八時に宿を出て、水沢行のバスの客となつた。

昨夜通つた地主町を経て、竹山、下町、山ノ目、中里とバスは停つてゆく。山ノ目や中里は昭和三十年に一関市に編入せられた。中里の次ぎの川屋敷からは平泉村に属する。平泉村に入ると、急にあたりの風物はみすぼらしくなつた。このあたりの農村の貧しさを物語つてゐるやうだ。佐野、祇園を過ぎ平泉駅に着く、駅前の茶店に手廻り品を預けて、またバスに乗り込む。桜並木の新道を十分ほど走つて、中尊寺前でバスを降りる。降りたところが月見坂の上り口であつた。あたりには、あやしい農家が一・二軒半ば鎖したままでひそまり返つてゐるばかりで、雨にしめつた赤土道に桜若葉が薫つてゐた。五月三十日の朝の空気はさわやかであつた。

「奥の細道」には、一関に一宿のことをしるしてゐない。曽良の日記によつてそれが知られるのである。旧暦五月十三日巳の刻に一関を発つた芭蕉は、正午近く平泉に着いた。「奥の細道」には「戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る」と一気に書きくだして、「その間二十余里ほどおぼゆ」と結んだ。一関については特記すべき何物もない。よつて此れを省いて、平泉の地名をあげたのである。平泉の地名をあげたのは、次に「三代の栄耀一睡の中にして」云々を叙せむがための伏線である。平泉には泊らなかつたから、「到る」といつて「宿る」とは言はぬ。そして「一宿して」「到る」と極めて巧みに言葉の使ひわけをしてをる。そして、また「その間二十余里」と受けたところの行文の妙を味ふべきである。「その間」は「心細き長沼にそうて」以下の文を受けてゐる。この文はまた「明れば又しらぬ道まよひ行く」から以下に連なつてゐる。つまり内容的には石巻から平泉まで、途中登米で一宿して漸く到り着いたと述べたのである。「この間」は当然、この石巻から平泉までの間を意味してゐると解すべきであらう。「この間」を石巻から平泉の間と解するほかに、これを松島から平泉までの間と解しようとする説がある。これは、

「十二日平泉と心ざし」以下「平泉に到る」までの全段を「この間」で受けたと見るのである。しかし、文の構成上から言つて、石巻を出て平泉に到る間を「この間」で受けてゐると見る方が自然である。曽良の日記に書き留めた里数で言へば、石巻から平泉まで二十里、松島からだと二十七里である。

附記。前回の文中、「涌谷」に「わくたに」と振り仮名したのを、東北大学の扇畑忠雄氏から「わくや」と訂すべきだといふ注意を受けた。東北地方の地名には「谷」を「や」と訓ます場合が多いやうだ。扇畑氏に謝意を表すると共に、ここに訂正しておく。

—大阪大学教授　文学博士—